
月好きの日常

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月好きの日常

【Nコード】

N4142X

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

私は月が好き。名前に月が2つも入ってるからかもしれないけど。ある日私が月を眺めると、1人の小さな男の子がやってきた。どうやらこれでも同い年らしい。

明日からの高校生活が何だか楽しいものになる予感がした。

はじめまして。(前書き)

私はある日突然（しかも受験勉強中に）あることを思った。

“ 日常を小説にしたらどうなるんだろう？ ”

事件があるから物語になるのであって、日常は事件がないから物語にはならない。

……誰が決めた、そんなこと。

日常だって、事件であふれているではないか！

はじめまして。

今にも日が沈みそうな夕暮れ。私は一人、町はずれを目指して歩いていた。

「うん、今日もいい天気。でも早くしないと日が暮れちゃうな」

そう言いながらもゆったりと歩く。

日の光が完全に消えたころ、私はゆっくりと歩みをとめた。目の前には古い雑居ビルがあった。

周りに人が居ないのを確認して、そつと中へと体を滑り込ませる。思ったよりも遅くなったから、近くにある階段を駆け足で上っていく。

「間に合ったかな」

階段の一番上にある屋上へと続く扉を開けると、目の前に柔らかな光がふわりと広がった。

「……うん、今日もきれいだな」

目の前に浮かぶ丸い月。明るくて大きな月。昨日とは違う、そして明日もきつと違う顔を見せるであろう月が視界いっぱい広がっている。

屋上の真ん中に膝を抱えて座りながら、ぼーっと月を見上げた。

きつと明日にはまた違う顔が見られるんだろうな、なんて思いながら。

その時、後ろにある扉からギギツという微かな音が聞こえてきた。今まで6年間ずっとここで月を見上げてきたけど、私以外の人がここに来るなんて初めてだ。

ゆっくり振り返ると、そこには小柄な人影が見えた。
身長はたぶん私と同じか、少し低いくらい。

「あれ、先客がいたか」

そう言いながら小柄な人影は私のそばにゆっくりと歩み寄ってきた。やっぱり身長は私のほうが少し高いみたい。

「女の子がこんなに夜遅くに一人か。あんまり良くないんじゃないの?」

「そっちこそ、子供がこんな夜遅くに一人でいちゃいけないんじゃないの?」

「子供って、おい！俺こう見えても明日から高校生だぞ！」

「えっ、嘘」

「……嘘じゃねえって。そんなにマジでびっくりしなくても……」

そういうと、一人でブツブツ、やっぱり俺って小さいか、とか、どうせ俺はチビですよ、とか言い出した。

どうやら身長が低いことはコンプレックスだったらしい。

「えっと、実はさ、私も明日から高校生なんだよね」

「嘘……。俺、同年の女の子にも負けたのか……。コホン、すごい偶然だな」

あー、最後ちょっと棒読みになった。言わないほうが良かったか

な。

「……まあ、しゃあないか。今に始まったことじゃないし……。俺、陽平ようへいっていうんだ。もしかしたら同じ学校かもしれないし、一応挨拶！」

「私は美月みつき。美しい月、って書くの」

「へえ、美月か。まるで今日の月みたいだな」

「私あんなに綺麗じゃないよ」

見ず知らずの人に名前を教えるなんて、今日の私はどうしちゃったんだろ。私がおかしくなってしまったのは、陽平君が優しい雰囲気を出してくれていたからなのか、月のやわらかくて優しい光のおかげなのか、よく分からない。

でも、確かに覚えていること、それは……。

「美月ちゃんもかわいいと思うけどな」

初めて会った人に胸をときめかせてしまったこと。

はじめまして。(後書き)

実はこの作品、先日完結した『例え、君が幽霊でも』の元小説となつております。

順番逆だろ！ と突っ込まれた方、ごもつともです。

これからもぜひ時間が空いているときには、この子たちの物語を読んであげてください。

貴方にとってこの物語が楽しいものでありますように。

以上、美織でした

第1夜（前書き）

奇跡の再会はお約束ですよね。

第1夜

初めて陽平君に出会った次の日、私は3回目の入学式を迎えていた。小学校、中学校に続く3回目。何度やってもこの緊張感は消えない。

新しいことが始まることへの期待と不安。

それらが全部一度にやってくるのが入学式なのだ。

「如月 美月」

「はい」

ぼーっとそんなことを考えていると、今日から担任になるのである。ろっ教師に名前を呼ばれた。返事をして立ち上がる。

……そういえば陽平君って、何処の学校なんだろう。まさか同じ学校、なんてことはないよね。

一度そう思うと、やっぱり気になってしまっるのがヒトの性つてものだ。自分の後に呼ばれる人の名前に耳をすませた。式中にきよろきよろするのはあんまり良くないからね。

「以上、319名」

最後のクラスの呼名を行っていた教師がそう言って、今年度入学生の名前が呼び終えられた。やっぱり、陽平、なんていう名前の人はいなかった。

「やっぱり偶然なんてありえないよね」

ちよつとがっかりしながら、これから1年間過ごすことになる新しい教室へと入って行った。

「改めて、今日からこのクラスを担当することになった、遠峰大地だ。担当は古典。まだまだぴちぴちの25歳だ。ちなみに彼女は募集中なんで、よろしく。俺からは以上。じゃあ、窓際の1番前の人から自己紹介してくれ」

何なんだ、この人！ 25の大の男が何がぴちぴちだ！！ しかも自分の教え子に彼女募集中、よろしく、って誰にだ！ 親か。母親に言えいいのか！？

私が盛大に（心の中で）突っ込んでいると、いつの間にか私の番が回ってきていた。やば、何にも考えてなかった。

「えと、如月美月^{（おんつきみづき）}。南中出身。趣味は月を見ること。誕生日は10月。以上、よろしくお願いします」

座ってから激しく後悔。なんて面白みのかけらもない自己紹介。しかも何か余計なことまで行っちゃったような気がしないでもない……。こんなんじゃないよ……。誰も寄ってきてくれないよ……。

予想通り、休み時間、私のところに寄ってくる人はいなかった。近くを通った時に声をかけることはあっても、話しこもつとすることはなかった。

私はどちらかといえば、自分から話しかけるのは苦手なほうだか

ら、話しかけてもらわないと話せないんだけどな。

そんなこんなで昼休み。

1人お弁当を抱えながら教室をきよるきよる見回す私がいた。

「お弁当どうしよう……。初日から1人なんて寂しすぎるしなあ」

やはり先ほどの自己紹介がいけなかったのか、みんな悪気なく私を無視している。初日から1人で食べてると、きつと1人が好きだとか思われて、ずっと1人で食べることになるんだらうなあ。

「どうしよう……」

「……らぎさん、如月さん！」

「うわ！ あ、は、はい！」

まさか急に私に話しかけてくれる人なんかいないと思ってたから、かなりのオーバーリアクションをってしまった。恥ずかしい……。

「えと、大丈夫？ あのね、如月さんのこと呼んでいる人がいるんだけど」

「あ、ありがとう。ごめんね」

驚かせてしまった子に一言謝ってから私は出入り口のほうを見た。

「え、あれ、嘘……」

びつくりする人物がそこにはいた。

「こんにちは、キサラギ ミツキさん。俺のこと覚えてる?」

「覚えてるも何も、昨日会ったばかりではないですか」

「あれ、何故敬語?」

「え、だって、私あまり陽平君のこと知りませんから」

「昨日のは?」

「あれは、……年下だと思ってたから……です」

「……………」

二人の間に流れる微妙な沈黙。

「ところでさ、もし一緒にお昼食べる人がいないなら差、俺たちと一緒にどう!？」

「うん!? 喜んで!」

変なテンションになったのは仕方がない。うん。許せ。

「じゃあ、俺の友達待たせてるし、食堂行こうぜ」

「え、あ、はい」

「それと、敬語とか別にいいから。俺も美月って呼ぶし、俺のことも陽平とか、陽ちゃんとか、適当に呼んでよ」

「はい、分かりまし……分かった。じゃあ、陽ちゃん、って呼びま……呼ぶね」

私の敬語と常体が混じった変な言葉遣いに陽ちゃんは苦笑しながらも、手を差し出した。

「これからもよろしくな。じゃ、行こうか」

「うん!」

やっぱり陽平君がいい人でした。

第1夜（後書き）

元は自分で好きなように書いていたので、切れ目がバラバラです。
短いのもあれば長いのもある……。

いっそのこと書きなおそうか。……でもめんどい。

第2夜（前書き）

課題が終わりません（泣

でもストツクしておいて良かったです。

おかげですぐにアップできます。早めが大事ですね……。

第2夜

校舎内を歩くこと、約5分。1年生の教室からは若干遠い場所にあるのが、この美華みかつき突高校食堂だ。

陽ちゃんと一緒に入ると、入口から1番遠い（といってもそこまで広くもないので、すぐに見つかる）席に座っている男女3人が声をかけてきた。

「おい、陽平！ こつちだ！」

「そんなに大声出さなくても聞こえるつつつの」

そんなことを言いながら、陽ちゃんはその声がしたテーブルのほうへと近づいて行った。

「遅ーよ。それよりも、その子？ 昨日会ったっていうのは」

「そう。如月美月さん」

「はじめまして。如月美月です」

「かわいー！ 俺、中山大知なかもまだいちっていうんだ。ついでに2組！ よろしくー！」

「おう！ こいつが俺らの中で1番のバカだ」

「何だと！ でも言い返せないのが悔しいぜ！」

なんか楽しそうな人たちだな。

私はちよつとほつとした。この人たちなら、3年間楽しく過ごさせそう。

「はじめまして、美月さん。あたしは遠峰とほみねゆかり。あたしもだいちやんと一緒に2組よ。いやあ、あたし男の子の中で女の子1人だったから居心地悪かったのよねえ。これからよろしくね」

「え、女の子1人って……。あの人は？」

私はそう言つて、テーブルの端のほうに1人黙つて座り、紙パツクの牛乳を飲んでいる人を指差した。ちらりと見た感じでは、女の子に見えたけど……。

「……ん、何？ 僕の顔になんかついてる？」

「じゃなくて、自己紹介でしょ、自己紹介！」

思いつきりゆかりちゃんに頭をはたかれたその人は、ちらりと私を見た後、いかにも面倒臭そうに自己紹介した。

「よこやまじんとたろう横山凜太郎。2組。帰宅部予定」

「あ、はあ。如月美月です。こちらこそよろしく……」

「凜ちゃん、あんた自己紹介短いわ。そんなんだから友達少ないのよ」

「別に、気にしない」

強いな、この人。私だったら無理だな、友達がないなんて。なんて変なところで感心しながらぼーっと新しくできた友人たちを眺める。

「いい加減にしなよ」

「へ？ 私？」

「違う。あんたの後ろの2人。他の人の迷惑になつてる。……まったく、いつつ後始末をするのは僕なんだから」

ため息をつきながらも、慣れた様子で手早く喧嘩になつてきた2人を回収する凜太郎君。

何だかんだ言つて、凜太郎君にとって2人は大切な友達なんだから

うな、ということがその目つきから分かった。

「みんな仲良しなんですね」

「うん。あたしたちみんな同じ中学校から上がってきたからね。ま、腐れ縁ってやつ？」

「「「お前が言うか！」「」」

3人からの見事な突っ込みが入って、私は思わず笑ってしまった。本当に楽しそうだな、この人たち。これからが楽しみだ。

「それよりもさー、早く飯食おうぜ、飯！」

「って、あんたは早弁してもう無いでしょうが！」

「ねえ、ゆかり様？ 俺に弁当を恵んでくれないかなー、なんて」

「ったく、あんたは。入学式早々早弁するか？」

「だって、高校生の早弁、憧れてたんだー」

「憧れてた、ってあんた……。この大馬鹿者！」

「あー、出た。北中名物、遠峰中山の夫婦漫才」

「め、名物？」

「そう。北中出身ならだれでも知ってるぜ。こいつらの漫才みたいな会話。これを文化祭で披露したんだから、そりゃもうすげーのなんの」

「へえ、仲がいいんだね」

「良くないわよー！」

「えー、そんなあ。ねえ、お願いだから、分けて？」

今度は可愛らしくお願いすることにしたようだ。

正直男子がやるとキモい。凜太郎君がやるなら問題ないんだろうけど。

「気持ち悪いわ!」

案の定ゆかりちゃんの強烈なビンタがとんできた。痛そう……。

「だいたい、ここは食堂なんだから、昼くらい買えばいいでしょ?」

「今日財布忘れた。……恵んで?」

「……この、大馬鹿者!」

本日二度目のビンタ。ホントに痛そう。左の頬が赤く腫れあがっている。

それにしても、懲りないなあ、この大知っていう人。もしかしてこれが楽しくてやってるのか?

1人そんなことを考えていると、いつの間にか陽ちゃんが私の隣に来ていた。

「おい、美月。お前も早く食べないと、昼休み終わっちゃうぞ。昼飯食い逃しても知らねーからな」

「え、嘘、もうそんな時間? やば、急がなきゃ」

私は慌てて椅子に座りなおしてお弁当を広げる。その隣に陽ちゃんも座って菓子パンを頬張っている。あんなので足りるのかな?

そんな私の視線に気がついたのか、陽ちゃんが説明した。

「これ、デザート」

……いつの間に食べ終わってたんだ、この人。

「まったく、しょうがないわね」

結局ゆかりちゃんが
大知君にお金を貸すことで話がまとまったよ
うだ。

「明日の昼だいちゃんのおごりね。……倍返しで」

ゆかりちゃんって、優しいのかひどいのか……。

「……食い足りねー。なあ、ゆかり。俺にも何か恵……」

陽ちゃんが急に言葉を切った。急に顔色が悪くなって、さらには
脂汗まで滲みだしている。

「いや、何でもない。何でもないです！」

目が合うと、ゆかりちゃんはにっこり首をかしげた。ゆかりちゃんも陽ちゃんの顔色が急に変わったことが不思議なのかな？

再び陽ちゃんに視線を戻すと、今にも土下座しそうな陽ちゃんがいた。変なの。

「さ、もうすぐ昼休みも終わるし、教室に戻ろうか。次は校舎見学だつて。もしかしたら一緒になるかもよ」

ゆかりちゃんの言葉で私たちはそれぞれの教室に戻ることにした。

第2夜（後書き）

話の切れが悪くて、いつもよりもちょっと長めです。

でも他の人の作品を読んでいると、もっと長めでもいいような気がするんですけど、どうですかね？ 1話につき3000〜5000字くらいで。

第3夜（前書き）

ストックここでつきましたorz
受験中だったから仕方ないよね……。

第3夜

「じゃあ俺、1組だから」

そうやって1番最初に抜けたのは陽ちゃん。軽く手を振って教室に入っていく。

「じゃあ、あたしたちもこれで。またあとでね」

そうやってゆかりちゃん、大知君、凜太郎君の3人が抜けていく。私はちよつとウキウキしながら3組の教室に戻った。とたんに感じる鋭い視線。ウキウキしていた気持ちが一気に消し飛ぶ。

その視線をたどると、1人の女の子と目があつた。知り合いではない、はずなんだけど……。

何か気に障ることでもしちゃつたのかな。

とりあえず話しかけてみることにした。

「えと、遠藤遥さんだよ。私に何か用かな」

「別に。何も無いわ」

自己紹介のときに聞いた名前を必死に思い出して話しかけてみたけど、返事はとても素気ないものだった。

これは本格的にやばいぞ。私、何しちゃつたんだろう。

「私、如月美月っていうの。よろしくね」

「……………」

空気が怖い。ひとまず愛想笑いを浮かべながら退散した。

自分の席に着いたところで担任の遠峰先生が教室に入ってきた。

「昼の前に言うの忘れてたけど、これから校舎の見学すつから、全員迷子にならないようについてこいよ。迷子になったら……知らん。自分で何とかしろ」

……なんていい加減な。

ん、待てよ。遠峰先生つて、ゆかりちゃんと苗字が一緒だし、目元もなんか似てるような……。

「ほら、ついてこいよ」

一人でさっさと教室を出ていく遠峰先生。よく教師になれたな。苗字のことは後でゆかりちゃんに聞いてみることにして、ひとまず遠峰先生の後についていくことに集中した。

「あ、美月ちゃん」

1人で廊下をうろろろしていると、ちょうどゆかりちゃんたち、2組メンバーに会った。

「どうしたの？ 迷子？」

「あ、う、はい……」

「この学校、無駄に造りが複雑だからね」

絶対に迷子になるまいと頑張ってみんなについていていたのだが、気がつくと周りに誰もいない。

どうやら迷子になったらしい、というところでちょうどゆかりちゃんたちに会えた。

「んじゃ、あたしたちも行くのか。こっちだよ」

「ゆかりちゃん、分かるの？」

「うん。小学生のころからここに入り浸ってたから」

「え、何で？」

「こいつの兄貴、ここの先生なんだよ。大地先生って言って、すっげえカッコいいんだぜ！」

「確か、如月さんのクラスの担任じゃない？」

さつきまでずっと黙っていた凜太郎君が急に口を挟んできた。何だ、普段も喋るんだ。

「凜ちゃん、何で知ってるの？ というか、大兄^{だいにい}って美月ちゃんのクラスの担任だったんだ」

「じゃあ、やっぱり遠峰先生ってゆかりちゃんのお兄さんだったんだ」

「まあね。ごめんね、大兄^{だいにい}って適当だから大変でしょ。現に美月ちゃん迷子になってるし」

私は曖昧に笑ってごまかすことにした。身内の人に悪口なんて言えるわけがない。

「お、何だ。お前らもう一緒にいたのか」

「おお、陽平じゃないか。お前も迷子？」

「んな訳ねーだろ。俺たちのクラスは自由行動なんだよ。ったく、

入ったばかりなのに自由行動って、迷子にさせる気満々だろ。まったく」

「んじゃ、全員揃ったところで行きましょっか」

というわけで、私たちは5人全員で校舎を見学することにした。それにしてもこの学校の先生って、みんなの適当なの？ いいのかな、これで。」

「大兄、美月ちゃん連れてきたよ」

「あ、ゆかり。お前から友達だったのか。ご苦労さん。それから学校では遠峰先生と呼ぶこと」

「生徒を迷子にさせる教師のくせに何言ってるの。……じゃあ美月ちゃん、またね！」

「うん、ありがとう」

ゆかりちゃんは、最後に遠峰先生に向って悪戯っ子のように笑いかけると、男の子3人を引き連れて立ち去って行った。

……ゆかりちゃんには絶対に敵わなそう。

「すまなかつたな、如月。ゆかりは……、まあ、いい奴だと思っからよろしくな」

「遠峰先生って、妹思いなんですね。私、一人っ子なので羨ましいです」

「そうか？ そうでもないと思うけど……」

そう言つと、遠峰先生は恥ずかしそうに下を向いた。先生の新しい一面、発見か？

「おい、全員いるか？ だれか確認しろ。んでもって、俺に報告しろ」

前言撤回。遠峰先生は遠峰先生でした。

こんな大男が恥ずかしがるなんて、ありえない。さっきのはたぶん、私の見間違いだ。

「よし、たぶん全員居るな。それとさっき思い出したんだが、来週の月曜、新入生歓迎テストだから」

「「えー!?!」」

たちまち上がる不満の声。特に多いのが、

「そんな歓迎いらねー!!」

という男子の声。

「じゃあ、やめるか？ あんなに苦労して入ったのにな。残念だけど、本人の意思なら仕方ないよな……」

「「やらせていただきます!!」」

初めてこのクラスがまとまった瞬間だった。やればできるじゃん、このクラス。

「範囲は入試のときと同じく中学までで習うところ全てだ。じゃ、帰る準備できた奴から帰っていいぞ」

なんて適当な！ でも早く帰れるなら文句言いません。

私はそそくさと帰る準備をすると、教室を出た。

「おー、やっと終わったか。早く帰ろうぜ。てか、美月ってどこに住んでんの？」

「やっと終わったか、って何でもう終わってんるの？ 私のクラスも早いほうだと思ったのに」

「まあ、あたしたちのクラスも、というよりもこの学校の先生たちって良くも悪くも適当な人たちばかりだからね。大兄見てれば分かるでしょ」

「まあ、ね」

「とりあえず帰ろうぜ。俺、腹減ったから何か食ってから帰りたい」

大知君がお腹を押さえながら言った。

「お前、財布忘れてただろ」

「凜におごつてもらおう」

「……3倍返し」

「凜……、ヒドイっ」

悪いのは大知君です。ホントに懲りないな、この人。

「ま、でもどっかに寄ってくのも悪くないかもね。どうせ行くなら僕、駅のそばがいい」

「そうね、駅のそばだったら何かと便利だし」

というわけで、私たちは学校を出て駅のほうへと向かった。

第3夜（後書き）

次回から、もしかしたら話の雰囲気とか少し変わるかもしれません。
ご了承ください。

第4夜（前書き）

あまあまです。

初々しいです。

見てると若干いらいらします。

そんなものでよろしい方のみ、先にお進みください（笑

私にこんなモノもかけたんだなあ……

第4夜

「「うま」」

口の中でとろける甘いアイス。これにときめかない女子高生がいないわけがない！

そんなこんなで駅前のアイスクリームショップにやってきた私たち5人は、甘いものが苦手だという陽ちゃん以外は全員手にカップに入ったアイスクリームを持っていた。

「しっかしよ、女子ってよくこんなんで腹もつな。俺、1コじゃたんねー」

「つか、女子はもとよりお前もよくそんな甘いもん食えるな」

1人甘いものが食べられない陽ちゃんはアイスコーヒーを片手に呆れ顔だ。

「だって俺、食いもんだつたら基本何でも平気だもん」

「お前なあ……」

陽ちゃんは大知君に関してはもう何か諦めたらしく、凜太郎君のほうへと顔を向けた。

「凜、お前は甘いもん平気なのか？」

「僕、こう見えても甘党だよ？ ここのメニューは全部制覇した」

「「ウソっ！」「」」

ゆかりちゃん以外の全員の声がそろった。ゆかりちゃんは顔色一つ変えず幸せそうにアイスを頬張っている。

「ゆかりちゃんは知ってたの？」

「知ってるも何も、アイス全制覇に付き合ったのはあたしよ。たぶん凜ちゃんはあたし以上に甘いモノ好きよ」

意外だなあ。凜太郎君って、結構クールなイメージだから勝手に甘いものは苦手だと思ってた。

「何、僕が甘いもの好きじゃいけない？」

「いや、そういうわけじゃないけど……、意外だなーって。凜君の意外な一面発見、みたいなの」

とたんに怪訝な顔になる凜太郎君。私、何かまずいこと言ったかな。

私が1人あわわしている、凜太郎君がまた口を開いた。

「凜君って……」

「あ、ごめなさい。嫌だった？ みんな凜とか、凜ちゃんって呼んでるから、私もいいかなって思ってた……。嫌だったら止めます」

「別に嫌じゃないけど。急だったからびっくりしただけ」

「じゃあ、凜君って呼ばせてもらおうね」

私は嬉しくなっと思わず顔がにやけた。それに気がついた大知君がさかさず割り込んでくる。

「あー、凜だけずるい！ ねえ、美月ちゃん、俺のことは大ちゃんって呼んでよ」

「うん。分かった。大ちゃん、だね」

「じゃ、俺もー」

「って、陽ちゃんはもう陽ちゃんって呼んでるでしょ」

あ、そっか。といって頭を掻いた陽ちゃんに全員が笑った。特に大ちゃんとゆかりちゃんは遠慮なしに爆笑している。

「美月」

「え？」

「君が僕のこと凜君って呼ぶなら、僕も美月って呼ぶ。いい？」
「もちろん！」

今日1日で何だかみんなとすつごく仲良くなれたような気がする。私は人と話すのが苦手だから、こんなに人との会話で笑ったりしたのは初めてかもしれない。

それもみんな、この優しくて楽しい4人のおかげだよ。

私は久々の楽しい会話を楽しんだ。

でも、放課後って短いもので、あっという間に外が暗くなってきた。

「うわ、もうこんな時間。そろそろ帰ないとまずいわね」

「ま、俺たち男組は別にいいけど、女の子はな。美月、家どこ？送ってくよ」

「え、そんな。いいよ。家、そんなに遠くないし」

「ん〜、でも、女の子が1人は心配だから、ね」

陽ちゃんの申し出に少々腰が引けながらも、お願いすることにした。

「じゃ、あたしのことは大ちゃんと凜ちゃんが送ってね」

「げ、俺はゆかりかよ」

「……………」

「大ちゃん、げって何よ、げって。それに凜ちゃん、何故黙る？」

帰る時も賑やかな3人を見送って、私と陽ちゃんも歩き出す。

「じゃ、俺たちも行こっか」

そう言っつて駅の方へと歩き出す陽ちゃん。

私が通う美華突高校は、東西南北にある中学校のちよつと北よりにある。

最寄り駅もどちらかと言えば北よりにあるから、私は通学には電車を使っていた。

「あれ、陽ちゃんも電車通？ 北中出身じゃなかったっけ？」

「俺、中学卒業した時に南中よりのところに引越したんだよ」

「へえ。どこらへん？」

陽平君が答えた住所は意外と私の家から近かった。

「家、すぐ近くじゃん。もしかしたら朝とか会うかもね」

「俺、朝迎えに行くよ。美月一人だと寝坊とかしてそう」

「な！ そんなことないもん！ 私、遅刻したことないもん」

「ホントか？」

陽ちゃんがニヤニヤしながら言った。からかってるんだな。むう。

そんなこんなしているうちに駅に着き、ちょうど来た電車に2人一緒に乗り込んだ。

寄り道したので帰る時間が中途半端だったのか、席は結構開いていた。私たちはドアのすぐ近くの席に並んで座った。

「そういえばさ、すごく今さらなんだけど、俺美月にちゃんと自己紹介してなかったよな」

「あ、そう言えばそうかも。最初会った時も結局あだ名とかしか言っただけだったし」

「悪い悪い。んと、じゃあ改めまして。俺の名前は井上陽平^{いのうえやうへい}。8月生まれでO型。好きなモノはバスケットかな」

「私は如月美月。10月生まれのAB型。好きなことは月を見ること。これからもよろしくね、陽ちゃん」

改めて自己紹介して何だか照れくさくなった。そのまま目を合わせる事ができなくなったので顔を俯かせる。

下を向いているといろいろ考えてしまうのがヒトの性というもの、そういえば私、こんなに至近距離で男の子と喋ったの、初めてかも……。

なんてことを考えているうちに、だんだんと顔が熱くなってきた。やばい、これは顔も赤くなってるかもしれない。

私の顔、見られちゃったかな、と思って陽ちゃんの様子をちらりとうかがうと、陽ちゃんも視線をそらしていた。その頬が少しだけ赤くなっていたように見えたのは気のせいだろうか。

「まあ、その、何だ。これからよろしくな、美月」

「こ、こちらこそ」

そんな若い2人の初々しい挨拶を、たまたま同じ電車に乗り合わせた乗客たちが微笑まじげに見ていたことに最後まで本人たちが気づくことはなかった。

第4夜（後書き）

感想、アドバイス、またはリクエストなどがありましたらお気軽に
どうぞ

間違いの指摘などもありましたらその度にちよくちよく直していく
のでよろしくお願いします。

次回は夜のお話です。またまた月が綺麗です。

第5夜（前書き）

甘い、甘いです。ここ大事です。2回言いました。

今回はホントに甘いです。書いてる作者本人が悶えるほどです。
なら書くな？ そんなの聞こえません。

第5夜

「あれ、美月んちってここなの？」

「うん。そうだけど」

陽ちゃんがやけに驚いた顔をして言った。次に、3軒先の角にある家を指差すと、

「俺んち、あそこ」

「ウソ!？」

めちやくちやご近所でした

「そつかく、こんなに近いのかあ。じゃ、俺、明日から毎朝美月のこと迎えに行くよ」

「え、そんなのいいよ。私朝遅いよ？」

「俺が早く行って起こしてやる。んじゃ、明日7時半にな」

「え、ちよつと待って、私無理だつてば!」

私の叫びには軽く手を振っただけで答えて、陽ちゃんは自分の家に入って行った。

ちなみに私が朝遅いのは本当で、今日も遅刻ギリギリの電車に乗っていた。その電車すら捕まるか怪しかったんだけどね。

「そんな、朝7時半、って私何時に起きればいいのか……」

そんな私が普段起きているのは7時。確実に間に合わない。女の子は支度に時間がかかるものです。なら早く起きろって？無理だから困ってる。

「お母さんに頼んでみよう……」

お母さんに事情を話すのはちょっと気が引けるけど、この際慣れるまではお母さんに頼むしか他にあるまい。お母さんはたぶん理由聞いたら大はしやぎして茶化すんだらうな……。

今から考えるだけで気が滅入る。

あ、でも起きたとしても、朝陽ちゃんが来た時点で早起きする理由がバレルのか。どっちにしる母、大はしやぎ決定。

「もういいや。諦めよう」

いくら4月とはいえ、日が落ちるとだいぶ冷えてくる。風邪をひく前に家の中に入ることにした。

「ハアア。やっぱり茶化された……」

その日の夜、私はまた町はずれのビルの屋上に来ていた。

膝を抱えて三角座り。拗ねるポーズの完成。

案の定、母親に明日早く起こしてほしいこととその理由を伝えると、

「きゃー、何、美月にもとうとう春到来！？ お母さん嬉しいわあ
！」

と、このテンションである。若々しいのはいいんだけど、もう少し

し大人になつてほしい。

ハアア、ともう何度目になるのか分からないため息をついていると、背後のドアからギイッとドアが開く音がした。

「やっぱりここにいたか。女の子が夜に一人で歩くのは危ない、つて言つただろう」

昨日と同じくそこには陽ちゃんがいた。

「つて、どうしたんだよ。拗ねてんのか？」

私のポーズを見て陽ちゃんが聞いてきた。原因は貴方だよ!!
とか言えるわけもなく、私はまた一つため息をついた。

「何だよ、俺なんかしたか？」

「したといえばした。してないといえばしてない」

「何だよ、それ」

陽ちゃんが苦笑しながら私に近づくと、隣に腰を下ろした。と同時に、自分が着ていた上着を私に差し出した。

「着てるよ。寒いだろ。女の子が体冷やしちゃいけないもんな」

「いいよ。それじゃあ陽ちゃんが風邪ひいちゃう」

「だったら今度からはちゃんと着てくること。今はとりあえず着とけ」

と半ば強引に私に上着をかけた。まだ陽ちゃんの体温が残つてて温かかった。

「……ありがとう」

「おう。俺は丈夫だからそうそう風邪なんか引かねえよ」

「そんなにちっちゃいの？」

私が悪戯っぽく聞くと、陽ちゃんにはやりと笑って私に向けた上着に手を伸ばした。

「そんなこと言うなら俺も一緒に入るぞ」

「え、ちよっと待って。近い、近いって！」

私が一人あわあわしているのを見て気がすんだのか、陽ちゃんは上着から手をパツと離して笑った。

陽ちゃんの笑いが収まると、私たちはそのまま二人で並んで月を見上げた。やっぱり昨日が満月だったらしく、今日の月は少しだけ欠けている。

そんな月をしばらく眺めていると、陽ちゃんが唐突に話しかけてきた。

「そついえばさ、美月って毎日ここから月眺めてるのか？」

「うん。もう6年になるかな。私、月を眺めるのが好きなの。観察ってほどじゃなくて、ただ単にぼーっと眺めるのが好き。もう日課みたいなもんだよ」

「そつか」

それからは特に会話らしい会話もなく、二人でただぼーっと月を眺めていた。

しばらくして、隣の陽ちゃんが小さく震えているのに気がついた。

「あ、ごめん、上着借りっぱなしだったから寒いよね。これ返すか

ら早く帰ろう」

「いや、寒さは別に平気だけど、そろそろ美月の親御さんが心配するよな。うん、帰ろう」

私が差し出した上着を着たとき、陽ちゃんが小さく、温かい、と呟いて微笑んだのは見なかったことにした。

「どうした、美月？ 顔真っ赤だぞ」

「別に!？」

ちょっと声が裏返ったのはご愛嬌だ。

陽ちゃんが変な奴、と小さく笑いながら私の手を握った。寒いから、と言いつつ陽ちゃんはそのまま歩き出す。

一歩ごとに私の心拍数も上がっていった。

第5夜（後書き）

体調不良と課題が重なって更新遅くなりました。
はい、もう元気です。大丈夫です。こんな甘いもの書いてても平気
です。

なんかもう、いろいろフラグが立ってます。察しのいい方はもう気
がついてると思います。美月はああでこうなります。
え、分からない？ 作者はネタばれしない主義です。

第6夜

「美月！ おはよー！」

次の日の朝、陽ちゃんは約束通り7時半きつちりに私のことを迎えにきた。昨日私と同じで夜遅かったはずなのに、何でそんなに余裕があるんだ？ そんな私も今日はきつちりお母さんに早めに起こしてもらったから余裕。……起こすときにまた軽く茶化されたのは秘密だ。

「おはよ、陽ちゃん。昨日遅かったのに早いね」

「うーん、俺、朝早いには慣れてるから。もともと中学ではバスケやってて、朝練とかあつたし」

「え、陽ちゃんってバスケやってたの？」

「……何だよ、そのめっちゃ驚いた顔は。ちっちゃい奴がバスケやってちゃ悪いかよ」

「いや、そういう意味じゃなくて。……そう、初耳だったから！ 陽ちゃんのことまだ何にも知らないな、って思って」

また陽ちゃんのどうせ俺なんて、が始まる前に私はフォローを入れた。フォローになってるか？ これ。でも効果はあったらしく、陽ちゃんがそれもそうだな、といって機嫌が直った。

「そついやまだ会って3日目だしな。お互いのこと知らなくて当たり前か。俺、知ってると思うけど北中出身で、引退するまでバスケやってたんだ。美月は？」

「私は美術部だった。とはいってもいつも月の絵ばかり書いてたから変な人扱いされてたけどね」

「らしいや」

ちよつとひどいことを言つて陽ちゃんはハハハ、と笑つた。私も悪い気はしなかつたので、一緒に笑う。こんな朝も悪くないかもしれない。

陽ちゃんと笑いながら歩いてみると、あつという間に駅に着く。駅のホームに入ると電車はすぐに来た。

「すごつ。タイミングぴつたり」

「ぴつたりつて……。電車の時間に合わせてきたに決まつてんだろ」

「え、そうなの？ 私何も考えずに家出てたから20分待つとか普通だつたなあ」

「お前なあ……………」

陽ちゃんが何か言いたそうな顔をしていたが、諦めたのかため息をひとつついただけで何も言わなかつた。変なの。

「ほら、陽ちゃん。早く乗らないと電車行つちゃうよ」

私は動かない陽ちゃんを押しして電車に乗り込んだ。いつもよりもずつと早い電車は結構空いていて、2人並んで座ることができた。

「すごい。ちよつと頑張つて早く来るだけでこんなに違うんだ」

「すごいって、お前いつも何時に来てるんだよ」

「うんと、8時くらい？」

「うわ、ギリギリ。もっと早く来いよ」

「だって、起きられないんだもん。月とか見ると夜遅くなつちやうから」

「それもそうか」

お。陽ちゃんは早く寝るとは言わない人らしい。

私が早く起きられない理由を人に話すと、だいたいの人は月なんか見てないで早く寝ろという。陽ちゃんのように何も言わないのは少数派だ。

「お前、月見るのホントに好きだもんな」

ドキッ。心臓が跳ねた。何も言わなかった人はだいたい呆れて何も言えなかった人だ。私の好きなことを理解したうえでこう言うってくれる人は初めてだった。

「どうした？ 顔ちょっと赤いぞ」

「何でもないっ」

ふいつと陽ちゃんから顔を背ける。

「何だよ、急に。変な奴」

そう言っつて、顔を見ていなくても陽ちゃんが小さく笑うのが分かった。私の心臓はまだドキドキしていた。

「ほら、もう降りるぞ。それとも乗り過ぎたいのか」

「降りるもん！」

陽ちゃんがからかってきているのは分かっているけど、ついつかみついてしまう。反射でかみついてしまうのは、陽ちゃんがこのくらいでは嫌わないと信じられるからか。

って、私朝から何考えてんだ！？ これじゃまるで……

「おはよ〜！ 美月ちゃんどしたの？ 顔真っ赤。恋する乙女みた

……」
「それ以上言わないで!!」

気がつくとも駅を出たところでタイミング良く鉢合わせたゆかりちゃん。私の顔を見てニヤニヤ笑っている。さっきまで同じことを考えていただけに、恥ずかしさ倍増だ。

「もう、美月ちゃんったら朝からカワイイ」
「~~~~~」

今日は朝からからかわれまくりだ。私の心臓もドキドキしっぱなしだし、何だかもう疲れた。

「おはよー！ 美月ちゃんに陽平」
「おはよ」

ゆかりちゃんの後ろから大ちゃんと凜君もやってきた。3人は家も近いらしい。

「いいな、陽平。朝から美月ちゃんと一緒かよ。俺なんか……」
「俺なんか、何？ 大ちゃんはあたしじゃ不満？」
「何でもないです!!」

朝からコント状態の2人の会話に、私と陽ちゃんは顔を見合わせて笑う。

「ほら、せっかく美月と陽平に合流したんだから早く学校行こう」
「やれやれ、といった感じで凜君が間にはいる。大ちゃんはほっとしたように、ゆかりちゃんはちょっと残念そうにいがみ合いをやめ

る。

「中学の時もこんな感じだったの？」

陽ちゃんにこそつと尋ねる。そしたら陽ちゃんもこそつと返してきた。

「そ。朝こんな感じで言い合って、途中でしびれ切らした凜が仲裁するまで続けんの。俺は面白かったからそのまんまにしてたしな」

中学生のころの登下校の様子が容易に想像できて、思わずくすりと笑いをこぼす。

「ねえ、美月ちゃん」

「ん、何？」

大ちゃんと言い合ってたゆかりちゃんが私に近寄ってきて、耳元に口を寄せながら言った。

「美月ちゃんは、陽ちゃんのこと、好き？」

「!?!? そんなことないよ!」

急に大声を出した私に不審げな目を向ける男子3人。慌てて声のトーンを落とす。

「なんで、どうして、急に何？」

「だって、美月ちゃんやけに赤い顔してたから。ふふ、楽しみだわ」

何が楽しみなのか分からないけど、また真っ赤になってしまった

私を不思議そうに見る男子3人の視線から逃げながら学校へと早足で向かった。

第7夜

「やっと着いた」

学校に着くなり、ゆかりちゃんから逃げるように自分の教室に入ってしまった。

教室内を見回すと、まだ朝早いせいか人はかなり少ない。

「確か今日は1時間め、国語だったよね。あ、高校って現代文と古典に別れるんだ。今日は……古典か。ってことは遠峰先生が最初の授業か」

一人でブツブツ言っていると、教室のドアがガラリと開いて、人が入ってきた。

「あ、遠藤さん」

「……おはようございます。今日は早いですね」

なんかすんごい嫌味言われたような気がするけど、私ホントに何しちやっただら。

小心者の私は口の中でもごもごとおはようございます、とか言いながら視線をそらした。

遠藤さんはそんな私を気にした風もなく、自分の席に着くと昨日もらったばかりの教科書を広げた。

「うわ、偉！ 予習してるんだ」

「……皮肉ですか？ それともただ私の邪魔をしたいだけですか？」

口調は疑問の態を保っているが、その実かなり怒っているのが分かる。私は慌てて弁解した。

「いえ、私はただ素直にすごいと思っただけで……。邪魔したなら謝ります。ごめんなさい」

素直に謝った私に少し驚いたのか、軽く目を睜ると少し柔らかくなった口調で話しかけてきた。

「ただ、高校の授業が不安だっただけです。普段私、予習なんかしてませんよ」

「あ、そうなの？ 実は私も」

そう言つて、小さく笑いあう。ちょっとだけ遠藤さんに近付けたかな？

これ以上邪魔するのも悪いので、私は自分の席についてぼーっと窓の外を眺める。遠藤さんみたいに教科書でも読んでるのがいいのかもしれないが、私が読んだら確実に寝てしまう。それが分かるぐらいには自分を知っていた。

「んー、暇。ゆかりちゃんのクラスにでも行ってみよっかな」

そう考えついた私の頭からは、すでに先ほどのことなんかきれいさっぱり消えていた。

2組の教室を覗き込むと、すでに陽ちゃんが来ていて、北中4人組で楽しそうに談笑していた。

私が入るのをためらっていると、凜君が私に気がついて近寄ってくる。

「どうしたの？ 中に入ってくれば？」

「いや、ちよつと入りにくいなって」

「ふうん」

そういうと、凜君は私の腕を掴んで半ば無理やり教室の中へと引っ張り込んだ。

「あ、美月ちゃん。やっと来た」

「早く来たからにはお喋り楽しまなきゃね。ま、部活始まるまでだけどね」

「部活つて、ゆかりちゃんたちはもう入りたい部活決まってんの？」

「一応ね。あたしは中学の時もやってたし、バスケ部に入ろっかな、つて」

「俺もバスケ部。ちっちゃいけどな」

「俺はサッカー部。それでも中学のときからやってたんだぜ」

「昨日も言ったけど、僕は帰宅部。特にやりたいこともないしね」

へー、みんなけっこう考えてたんだな。私はどうしようかな。何も考えてないや。

「美月ちゃんは？」

ゆかりちゃんに聞かれたけど、私はすぐに答えることができなかった。しばらく考えて出た答えがこれ。

「……分かんない。仮入部るとき見てから決めよっかな……なんて「んー、別にそれでもいいんじゃないかねーの。高校の部活つて、中学の時よりも種類増えるもんな」

「あ、そうだ。美月ちゃん、決まってないなら一度バスケ部見にきなよ」

「バスケ部かあ。私運動苦手だからな……」

「マネージャーとかもあるし、見るだけなら。ね？」

そこまで言われたら断れるわけもなく、私は首を縦に振った。

「美月ちゃん、サッカー部にもおいでよ！　こんな可愛い子がマネージャーさんだったらチームの志気も上がるしね」

大ちゃんが目をキラキラさせながら言ってきた。そちらにも苦笑しながら首を縦に振って了承の意を伝える。それだけで嬉しそうなおちゃんを見ていると、何だかこちらまで嬉しくなってくる。

「でも、まだ入るとか決めてないからね？」

これだけは念を押しておく。

「分かってるって！　ああ、俺美月ちゃん来たら張り切っちゃうかも！」

「つたく、相変わらず大知は単純な奴だな」

「あたしも行ってあげようか？」

「ご遠慮します！..!」

この一言でまた言い争いになった。凜君は横のため息をついているけど、言い合う2人は何だかんだで楽しそうだった。

「じゃ、俺たちそろそろ教室戻るわ。予鈴なったしな。行こうぜ、美月」

「え、嘘、もうそんな時間？」

陽ちゃんが教室を出るときに、じゃ、といって手を振ると、まだ

言い争っている2人にため息をつきながらも凜君が手を振り返してくれた。

教室を出ると、1組の陽ちゃんは右に、3組の私は左に行く。別れる直前に陽ちゃんが、

「また昼にな。寝るなよ」

「分かってるって!」

からかってくるから、また顔が赤くなってしまった。教室のドアに手をかけて、軽く息を整えてから中へと入る。

時計を見ると、始業まではまだ少しだけ時間があった。

「まだ時間あるし、教科書でも読んでいようかな」

読むこと数秒……

「……(zzz)」

そのまま数分後。

「おーし、じゃあ1時間め始めるぞー。誰か如月起こしてやれー」

初めての授業からやらかしてしまった私であった。

第8夜（前書き）

吐く！ 砂糖吐く！！

作者本人が言っているのだから間違いありません。

もう一個別に書いているほうが若干シリアス気味なのでその分こちらで発散です。

やっぱり書くならベタ甘恋愛だよね

第8夜

その日の放課後、私は昨日と同じメンバーと並んで帰り道を歩きながら、今日の出来事について愚痴っていた。

「それでね、あの後予習しようと思って教科書眺めてたら寝ちゃって……結局大地先生が入ってくるまで気がつかなくて起こされた……」

「お前教科書読んで寝るタイプか！ ハマりすぎてて笑える！」
「ちよつと、陽ちゃんに大ちゃん、笑いすぎ！」

私が噛みついてるのは陽ちゃんと大ちゃんの2人だけだが、ゆかりちゃんと凜君も遠慮容赦なくクスクスと笑っている。まあ、私もそれ狙ってたから気にしないけどね。むしろ一緒に笑ってる。

「もしかして、美月ちゃんは勉強苦手な人？」

「うう、その通りです。ここに入れたのもびっくりするくらい……」

「何だ、じゃあ俺と一緒にだ！」

「いや、いくらなんでもお前と一緒にしたら美月が可哀想だ」

大ちゃんの言葉に陽ちゃんが遠慮容赦なく突っ込む。その横では凜君がやれやれ、とでも言うつようにため息をついている。大ちゃんの成績ってそんなに悪いんだろうか？

「うわあ、そんなこと言われると来週のテスト心配になってきた……」

「私もだあ。入試のときと一緒に言われてもそんなのもう頭から抜けちゃってるよ……」

大ちゃんと2人仲良く頭を抱える。今日はもう金曜日だから、テストまで実質あと3日だ。

「ちょ、そんなに？ 大ちゃんはともかく美月ちゃんまでそんな子だとは思ってなかったわ」

「いいなあ、ゆかりちゃんは余裕そうで。凜君は……言わなくてもよさそう」

「ちょ、ちよつと待て。なぜそこに俺が入ってない？」

「え、だって陽ちゃんはこの2人に比べてあんまり……」

だって、陽ちゃんって結構バスケバカだったみたいだし、この性格と勉強ってあんまり結びつかない。せいぜい私と同じくらいかと……。

「あら、美月ちゃん。こう見えても陽ちゃんは北中で結構成績良かったのよ。このメンバーでは凜ちゃんとあたしの次くらいに。学年で言うと……30番くらい？」

「ゆかり、そこまでバラさなくも……。恥ずかしいだろ」

陽ちゃんが照れてる……。って、突っ込むところはそこじゃなくて！ 陽ちゃんって運動もできるのに勉強もできるんだ！ 私とは大違いだなあ……。

「ねえ、勉強ってどうやったらできるようになるのかな？」

「あ、それ、俺も聞きたかった。万年最下位争いの俺にも教えてくれよ」

あゝ、やっぱり大ちゃんって最下位争ってたんだ。よくそれでうちの高校入れたね？ 逆に尊敬です。

「そうね……。よし。みんな土曜日空いてる？ あたしんちで勉強会開くわよ！ 美月ちゃんももし暇だったらおいで。専属教師が見てくれるから」

そう言っただけ意地悪そうにゆかりちゃんが笑った。専属教師って、大地先生のことかな？ ゆかりちゃんのその顔でなんとなく察せられた。

「お、大地先生が見てくれんの！？ よっしや、絶対行く！」
「久々に大地さんが見てくれるのか。じゃ、僕も行こうかな」

ん？ 大地先生って何気に人気？ 勉強がとてもよくできそうな凜君までもが楽しみにすると言っただから相当なものだろう。

「俺、大地さんのおかげでこの高校入れたようなもんだしな……」
「そうねえ、あんたが大兄に1番迷惑かけてたもんねえ」

ゆかりちゃんのその一言でまたもや喧嘩勃発。しかし私にはもうそれがただのじゃれあいに見えないのでさりと無視する。
そんな私に凜君がこそつと教えてくれた。

「僕たち、受験勉強するときみんな大地さんに教わってたんだよ。大地さん、教えるの上手だし。1番危なかった大知だから、大地さんもつきつきりで勉強見てたな」

「あはは、っばいね」
「そういや凜も自分の勉強あるのに大知の勉強見てやってたよな」
「まあね。僕もみんなと同じ高校に行きたかったし」

お、何気に凜君の仲間思いなところ、発見か？ しかし、あの1番ピリピリする受験で他人の勉強まで見る余裕のある凜君……恐

るべし。私は絶対に見てもらおう側だな。

「まったく、勉強会するんでしょ。美月も困ってんだから早く予定決めちゃわないと」

凜君の仲裁でやっとゆかりちゃんと大ちゃんの言い争い（じゃれあい）が終わった。ホントに仲いいな、この2人は。ここまでくると逆に羨ましい。

「それもそうね。じゃあ、確か陽ちゃんは美月ちゃんと家近いのよね？ 陽ちゃんはあたしんち知ってるはずだから美月ちゃん連れてきて。時間は午後2時から！ 時間厳守よ！」

そう言っつて、いつの間にか駅の前まで来ていたので、そのまま凜君と大ちゃんを引きつれて立ち去っていくゆかりちゃん。もう、ホントに男らしい人です。

ゆかりちゃんの後ろ姿を見送った後、陽ちゃんと私は顔を見合わせて笑った。

「というわけで、時間厳守らしいので、1時半に迎えに行くよ」

「え、迎えに来てもらうなんていいよ。大変でしょ？」

「どこが大変なんだよ。家すぐ近くなのに。駅に向かう途中みたいなもんだし、気にすることねーよ」

「そう？ じゃ、お言葉に甘えて……」

うわあ、なんか恋人同士みたいな会話だなあ……。なんてことを考えていたら、ホントに恥ずかしくなってきた。内容的にはただ勉強会に行くだけなのに！

「ん、どうした、美月。顔赤いぞ。熱あるなら明日行くのやめとく

か？」

「あ、いや、別に熱とか無いから気にしないで！　じゃ、また明日！」

「また明日って、同じ電車だろうが」

うわぁ、私のバカ！　何でこのくらいでテンパってるのよ！

それから少し気まずい雰囲気（陽ちゃんは何か機嫌よさそうだったけど）のまま電車に揺られて帰る放課後でした。ホント、今日一日ついてない。

第9夜

「ふわあああ……。今何時……?」

次の日、つまり土曜日。私は眠い目をこすりながら枕元にいつも置いている役立たずの（自分で無意識に止めてるだけ）目覚まし時計に手を伸ばす。カーテンの隙間から差し込む日の光が殺人的な力を持って私に襲いかかるようだ。

「今日は陽ちゃんが迎えに来るから早く起きな……1時……? だと?」

瞬間はつきりと意識が覚醒する。

ちよつと待て。今日の約束は何時だった? もちろん1時半。変わるはずなんてあるはずがない。今の時刻は? ……1時1分。

「こんなところで1分も時間の無駄遣いしてる暇があるか!」

そこからの私はすさまじかった。誰か褒めてくれ、私を。

5秒で階段を駆け下り、10秒で髪を整える。さらに置いてあった昼食（という名の朝食）を15秒で平らげ、20秒で洗顔と歯磨きをすませる。ここまでで50秒、約1分だ。

続いて30秒で自室に戻って持ち物の確認をし、クローゼットを開けたところで私の時間は止まった。

シマッタ、ナニヲキテイコウ。

そもそも友達のうちに行くのだから、家にいるときよりもちよつ

とおめかしすればいいだけである。

ところがどっこい、今回は担任の家でもあるのだ。休日に先生に会うとか、何着てけばいいのよ!? まさか制服着ていくわけにもいかないし、あんまり派手な服も着ていけない。このさじ加減が微妙である。

結局クローゼットの前で25分間唸った結果、淡い色のシャツに濃いめのカーディガンを重ね、ひざ丈ののスカートという何とも無難で地味な格好に落ちついた。

姿見の前で一通り自分の姿を確認し、OKサインを出したところで玄関のチャイムが鳴った。時計を見ると1時半ぴったり。ギリギリ間に合った。

準備しておいた鞆を掴むと、私は階段を駆け降りた。

「行ってきます!」

一言だけ中のほうに声をかけて、私は外に飛び出した。

「よ! 今日は寝坊しなかったか?」

「し、してないもん!」

早くも凶星をあてられ、動揺する私。そんな私を見て陽ちゃんはクスクスと笑っている。

「まあ、いいや。じゃあ、行こつか」

陽ちゃんが駅のほうへと歩き始めたので私もその隣に並ぶ。隣を歩いていると、ふと疑問が浮かんだので、私は訪ねてみることにし

た。

「ねえ、陽ちゃんの得意教科って何？」

「んー、基本的に理系教科なら得意だけど、物理が一番かな。美月は？」

「私？ 私は……国語……かな？」

「何だ、その自信なさげな感じ！」

けたけたと笑う陽ちゃんの声が住宅街に響く。一通り笑って気がすんだのか、陽ちゃんが私を振りかえった。もちろん私の機嫌はナメである。

「あー、悪い。悪かったって。だから機嫌直せよ。な？」

な？ って、機嫌損なわせたのはあなたでしょ！ とはヘタレの私には面と向かって言えるわけもなく、仕方がないので許すことにした。

駅について、またもやタイミング良くホームに滑り込んできた電車に乗り、いつも登校のとき降りる駅で電車を降りた。たぶん時間とか調べてきてたんだろぅな。さすがです。

「ゆかりんちは駅から歩いて15分くらいのところだから」

そう言って歩道を歩き始める陽ちゃん。私が隣に並ぶとさりげなく車道側を歩いてくれた。結構紳士的なんだな。こう見えても。

気づけば歩幅も合わせてくれているようで、何とも歩きやすい。

しばらく歩いて陽ちゃんは一軒の家の前で立ち止まった。

「ゆかりちゃんちって、ここと？」

「ん。で、あっちが凜ちで、そこが大知んち」

そう言ってゆかりちゃんちの斜め右前にある家と左隣の家を指差した。みんな近っ！

「んじゃ、行くぞ」

そう言って陽ちゃんがインターホンに手を伸ばした。

「……………」
「ありがとう」

小さくそう言ったら、陽ちゃんは一瞬だけ動作をとめた……………よう
な気がしたけど気のせいかな？

ま、でも感謝をこめて、ね。一応。
帰りにもう一回言ってみようかな。

第10夜

インターホンを鳴らすと、ゆかりちゃんはすぐにドアを開けた。

「いらっしやい！ 美月ちゃんたちで最後よ。早く上がって上がって！」

「お邪魔します」

私と陽ちゃんは礼儀正しく頭を下げてから玄関に上がる。ゆかりちゃんの後について2階に上がり、右側の1番手前の部屋に入る。中にはすでに凜君と大ちゃんがすでに勉強を始めていて、丸めたノートで大ちゃんが凜君に頭をはたかれているところだった。

「痛ッ！ つたく、凜は勉強のことになると容赦ないよな……」

「それはお前が出来なさすぎるからだ。大知以外なら僕ももうちょっと紳士的に教える。そもそもお前はこれくらいしないと勉強しないだろう」

「うう……その通りです」

へえ、意外。凜君もこんな風にじゃれあうこともあるんだ。いつもクールな凜君が子供みたいに言い合ってるのはかなりレアかもしれない。

じっと見つめる私の視線に気がついたのか、凜君が顔を上げた。目が合うと、凜君はすくつと立ち上がり、私のそばまで来た。

「今日の僕、なんか変？」

「あ、いや、ちょっと珍しいな、と思つて。凜君はいつも仲裁とか抑え役だからじゃああってるとこ見たこと無かつたし」

「ふーん。ま、僕も今日はoffモードだからね。僕って結構子供っぽいよ。がっかりした？」

「全然。逆に新しい一面発見して嬉しいかも」

私の言葉に凜君は苦笑してそのまま離れていった。

「じゃ、全員揃ったことだし、先生呼んでくるから。それまでちょっと待ってて」

ゆかりちゃん言葉にそれぞれ持ってきたワークやらノートやらを出して広げた。私も数学と英語のノートを広げる。書いてあるのは超基本的なことなので若干恥ずかしいが、頭の出来の悪さはすでにカミングアウト済みなので今更だろう。

大ちゃんが凜君に頭をはたかれつつ勉強しているのを眺めながら待っていると、ほどなくしてゆかりちゃんが大地先生を連れて部屋に戻ってきた。

「あ、如月も来てるのか。教え子が増えたな」

「すみません。お世話になります」

「いや、教えること自体は好きだから全然構わないぞ。むしろもっと連れてこい」

休日だからか大地先生の雰囲気もいつもとちょっと違う。これがあの初日から担当の生徒をほったらかしにした人物と同じなのか！？

「ホント、大兄といい、凜ちゃんといい、勉強のできる人はonnとoffの差が激しいのかしら」

私の心の声を映したかのように、ゆかりちゃんがぼそりと呟いた。

私も心の中で激しく同意する。

「んじゃ、早速始めるとするか。凜、お前先に大知の勉強見てやれ。俺は手始めに如月の勉強見るから。ゆかりと陽平は自分で勉強できるな」

「分かりました。ほら大知、さっきの続きから」

「分かってるって。あー、もうどうしてアルファベットって1文字につき1音じゃないんだよ!！」

ゆかりちゃんと陽ちゃんは黙々とペンを動かし始め、大ちゃんはときどき凜君に「だから違つとさっきから言ってるだろ!」と怒られながらも自分の勉強をしている。ここまで凜君を怒らせることができるのは、もう一種の才能だと思う。うん。で、凜君はというと、大ちゃんの勉強を見ながらも自分の前に広げたノートに何か難しげな数式を書き連ねている。……恐るべし、凜君。

「で、如月は何やるんだ?」

「一応英語と数学を持ってきました」

「んー、じゃあ……先に英語からやるか。他のやつらはしばらく質問でなさそうだし」

大地先生が一通りみんなのノートを覗き込んでから言った。大地先生はふと立ちあがって部屋から出ていくと、すぐに何やら分厚い本を持って戻ってきた。

「如月、基本的な構文は分かってるな? 最低限の英単語も」

「えと、受験勉強でやったくらいなら」

「じゃあ……このページの問題やってみろ」

そう言つて大地先生は手に持っていた本の最初のほうのページを

開く。ざっと英文に目を通すと、なんとか書いてあることは分かりそうだ。

「これ、俺の大学のときの友人が書いたやつなんだけど、割と出来がいいんでこうして使ってるってわけ」

「先生のお友達ですか。すごく優秀な方なんでしょうね。私でも理解できそうです」

「まあな」

大地先生が少し照れくさそうに笑った。

それからしばらく大地先生に英語を教えてもらう。そこでふと疑問を持った。……先生の担当って、確か古典だったよな。

そこで、問題が一区切りついたところで私は大地先生に聞いてみることにした。

「あの、先生。先生の担当教科って、古典ですよ？ 他の教科も教えられるんですか？」

「あ、うん。まあな」

「そうなんだぜ、美月ちゃん！ 大地さんってすっげえ頭いいんだ！！」

急に興奮した大ちゃんが話に割り込んできた。それを今にも誰か（大ちゃん）を射殺しそうな目で見つめる凜君。しかし、興奮した大ちゃんはそれに気がつかない！

「俺、全教科ダメだから、全部大地さんに見てもらったんだ。しかも全部分かりやすいんだぜ……」

「大知、人が説明しているのに他人の会話に入りこむとは……随分な余裕だね。じゃ、僕の説明もいらないよね？」

凜君、その黒いを通り越して闇のスマイルは超怖いです。大ちゃんなんか恐怖でガタガタ震え始めました。それを見たゆかりちゃんと陽ちゃんは爆笑しています。正直笑い事じゃないと思います。

「これ、ヒント無しで解いてもらんよ。僕の説明はいらないんでしょ？」

そう言っつて凜君が指差したのは今凜君が解いているのと同じようなかなり複雑な数式。当然私の頭ではそれが何を表しているのかすら理解することはできません。

「すみませんごめんなさいゆるしてください神様仏様凜様」

たぶん自分でも何言ってるのか分かってないんだろうな。そんな勢いで大ちゃんが土下座するから、元から爆笑していた2人に加え、大地先生もが大爆笑しだした。

「大知、Let's try」

…完璧な発音withブラックスマイル。かなり怖いです。

完璧に撃沈した大ちゃんが復活したのは、私が英語の問題を一通り解き終えて、数学の勉強に移る頃だった。

第11夜（前書き）

途中で自分が何書いているのか分からなくなりました……。
今回ちょっと（かなり？）グダグダです。ごめんなさい。

第11夜

「先生、次、数学なんですけど……」

「ノート？ どれ、見せて……」

私がおずおずと差し出したノートを受け取ってざっと目を通す遠峰先生。みるみる表情が引き締まっていく。

「……………」

遠峰先生は無言でノートを閉じて置くと、また無言で部屋を出て行った。そして戻ってきたときに一緒に手に持っていたのは、また何やら分厚い本。

「予想外だった。まさかここまでの奴が大知のほかにもまだいたなんて。とりあえずお前はこっからここまでのページ、全部やってみる。簡単な計算問題だから分かるだろ？」

「えーと、 $1 + 2 + 3 + \dots + 15 = 105$ 、 $(3 + 3) = 6$ 」

「そっからか！？ ……お前、よくうちの高校合格したな」

というわけで私は遠峰先生に言われたページをひたすらせつせと解いていた。2時間ほど続けていると、だんだん解くスピードが速くなってきた気がする。

その間、凜君やゆかりちゃんや陽ちゃんが遠峰先生に、

「この問題の？は？？？？？」

「ああそれは、？？？？？？？？？？？？」

読者様ごめんなさい。私の中でうまく脳内変換できなくてこのよ

うな結果になってしまいました。恨むなら私の馬鹿なこの脳を恨んでください。

何はともあれ、このような難しげな質問をしていた。

「そろそろ休憩にするか」

遠峰先生が、今にも（というかすでに）頭から湯気を出しそうな私と大ちゃんの様子を見たのか、休憩宣言をした。

その言葉に一齐に伸びをする私たち5人

「そうだ、これ、うちの姉貴から。勉強の息抜きに作ったから良ければ食べて、だって」

「梓紗さんから!? やった!」

一気にテンションが上がる私と大ちゃんを除く4人。何この異様なテンションの上がりよう。そして梓紗さんって誰?

私の疑問に気がついたのか、大ちゃんが説明してくれた。

「梓紗っていうのは俺の姉貴」

「梓紗さんのお菓子って、すごくおいしいんだよ。美月も食べてみる?」

そう言って陽ちゃんが差し出してくれたのは貝殻の形を模したお菓子、マドレーヌだ。黄金色に焼けたその菓子は、見るからにとてもおいしそうだ。

思わず唾をぐくりと飲み込んでしまう。

「……いただきます」

陽ちゃんからマドレーヌを受け取って、一口食べてみる。瞬間、口の中に広がるバターの香りと、砂糖とは違うほのかな甘み。

「これは……、蜂蜜？」

「美月よく分かったな。そう、蜂蜜。姉貴、お菓子作る時は隠し味に蜂蜜使うのがこだわりなんだって。砂糖とは違う甘みがあるらしいんだけど、俺には正直分からん」

そうか、やっぱりこの甘さは蜂蜜か。一人納得していると、目の前にもう一つマドレーヌが差し出された。顔を上げると、そこにいたのは陽ちゃん。

「美月、これ好きなんだろ。俺、甘いのが苦手だし、良かったら俺の分食えよ」

「そんな、悪いからいいよ。それに、陽ちゃんも食べてみたら？」

これなら食べられるかもよ」

「んー、食えないことはないんだけど、俺が食うより美月が食べたほうがいいかな、って思って。美月、すごく幸せそうに食べてたから」

「なっ!？」

顔が一瞬で真っ赤になる。私、そんな顔で食べてた!？ 確かに甘いものは好き。特に手作りのお菓子は作った人の気持ち伝わってくるような気がして、特に好きだ。だからといって、人前で頬を緩ませるようなことはしてなかったはずだ。

「私、頬緩んでた？」

「かなり」

「……見てた？」
「バツチリ」

恥ずかしさのあまり顔を俯かせてしまう。まあ、女の子同士だったらこの幸せを共有できるし、なにせ同性だからまだ許せる。けど陽ちゃんは男の子だ。異性にアホみたいに頬を緩ませているところを見られていたなんて、恥ずかしさで今なら死ねる。

「美月が幸せそうに食べてるところ見たらさ、もつとあげたくなるんだよ。何故か。だから、俺の分も食べて？」

「……陽ちゃんって実は、タラシ？」

「な！？ バカ、そんなつもりじゃ……」

「そうよね、陽ちゃんって結構罪作りな男なのよね」

「わ、ゆかり！？ お前急に入ってくんじゃ……」

「あら、美月ちゃんと二人っきりで話してたかったの？ ごめんなさいね」

「そうじゃない！！！」

ゆかりちゃんが入ってきてくれたおかげで私はなんとか落ち着きを取り戻せたけど、陽ちゃんはまだゆかりちゃんにからかわれている。それを見ている外野男子3人も笑って（大ちゃんは大爆笑）見ているだけで止めようもしない。

……陽ちゃん、だんだん涙目になってきてるぞ。顔はもう真っ赤だし。ゆかりちゃん、そろそろやめたほうがいいんじゃない……。

とは思いつつも、陽ちゃんがこんなにいじられているところはなかなか見れないのでよく見ておくことにする。

「ゆかりの馬鹿……！」

最後に陽ちゃんがゆかりちゃんにそう言って部屋を飛び出していきりタイム終了。それを見た大ちゃんがさらに爆笑している。陽ちゃんの後ろ姿は、まるで少女漫画で『うわーんっ!』って言いながら走り去る女の子のようでした。結構おもしろかった。

「ゆかり、お前、もうちょっと手加減してやれよ。慰めに行くの、俺だぞ」

「いいじゃん、仲いい証拠だよ　じゃ、大兄、あとは任せた」
「はいはい」

遠峰先生はやれやれ、とでも言うように陽ちゃんを追って部屋を出て行った。

「ゆかり、ホントに男子には容赦ないよな」

「そうそう。僕も何度泣かされたことか」

「え、凜君も？」

「あんたは小2まででしょ。まったく、すぐに可愛げがなくなっちゃって」

凜君は小2のころから凜君だったようです。

第12夜（前書き）

試験：学生の敵。主に作者を始めとする勉強苦手組に多大なダメージを与える。

説教：お叱りの言葉。主に作者を始めとする勉強苦手組が両親からいただくもの。

第12夜

「始め！」

先生の合図で一齐に紙をめくる音が響く。私もその中の1人で、少々緊張しながらも紙をめくる。

今日は月曜日で、今は1時間め。新入生歓迎テスト第1弾、英語だ。

大丈夫。土曜日にあんなに教えてもらったんだから。自分にそう言い聞かせて紙にペンを走らせる。あ、意外にいけるかも。

回答欄を全て埋めて、顔を上げる。時計を確認すると、まだ10分も余っていた。これはすごいぞ。私、中学の時も時間なんて余ったこと無かったのに。なんか感動。

残りの10分間、私は初めての見直しというものをやってみた。今まで友人たちから話には聞いていたが、実際自分でやってみるのは初めてだ。

「止め」

先生の合図に私はまた顔を上げた。手ごたえはあった。なかなかの出来だろう。余は満足じゃ。

なんて自分の中で一人芝居をしていると、不意に後ろから声をかけられた。

「よお、美月！ テストどうだった？」

「あ、4人とももう終わったの？ テストは結構いい感じかも」

「そりゃ良かった。大地先生に教えてもらって結果がどうなるか……」

そう言っただけで陽ちゃんが恐ろしげに身体を震わせた。そ、そんなに恐ろしいのか？ 陽ちゃんの後ろの3人に視線をやると、全員頷き返した。マジか。

「あははー、頑張ってたよかった……」

「あたしたちも仲間を失うことにならなくて良かったわ」

そこまでののか。ホントに良かった、頑張った。よくやった、自分。

「次は国語だろ？ これ落としたら大変なことになるからな。あらかじめ言っておくけど」

「いやいやいや、もう遅いから。とりあえず善処します……」

「健闘を祈る」

言いたいことだけ言って、4人はそれぞれの教室に帰っていった。脅すだけ脅して帰るなよ。

「席につけー。テスト始めるぞー」

2時間目の試験官が教室に入ってきて、騒がしかった教室が一瞬さらに騒がしくなり、静まり返った。緊張してるのって、私だけじゃないんだろ？ そんなことを考えていたら、ちよっただけ気持ち軽くなった。

「失礼します。何か質問ある人いるかー？」

テスト開始から十数分後、遠峰先生が教室に入ってきた。やっぱり国語担当教師。ちゃんと各教室を回っているようです。ゆっくりと教室内を回り、私の横を通り過ぎるとき、一瞬立ち止まった。

「頑張れよ」

一瞬先生が開いて見せた手にはそう書いてあった。唾然として先生の後ろ姿を見つめる。いいのか？ 教師がこんなこととして。鼻屑とかで訴えられるんじゃない……。ま、私から言うことはないけどね。

「ホント自由だなー、この学校」

テスト中だというのに思わずポロリとこぼしてしまう。試験官の先生に怪訝そうな目で見られる。おっと、いけないいけない。先生に何もありません、とでも言うように首を振ってみせてから、またテスト用紙に視線を戻す。

国語も何とか見直しが出来る時間を残して解き終わり、なかなかの出来だった。……と思う。

「みーつきー！」

「毎回毎回、来んなー！」

テスト用紙が回収し終わり、試験官が出ていくとほぼ同時に陽ちやんが教室に飛び込んできた。

「美月ー、俺、俺……！」

「あー、はいはい。何かしくじったのね。後で大兄にたっぷりしぼられなさい」

「ゆかり！ お前はそう言うけどな、大地先生って怒るとめちゃう

「ちゃ怖いんだぞ!!」

陽ちゃんは理系なのかな？ 何でもできるように見えたけど、苦手教科もちゃんとあったんだな。よかった……のか？ とりあえず陽ちゃんのお説教は決定したようです。私ひとりじゃなくてよかったです。

「……美月、お前なんでそんなに嬉しそうなんだよ」

無意識に頬が緩んでいたらしく、陽ちゃんに軽く睨まれる。

「いや、怒られるの私だけじゃなくなっただかも、って思ったらちょっと嬉しくて」

「そこ喜ぶとこじゃねえだろ！ 言っとくがな、大地先生は国語に關しては特に厳しいんだからな!!」

「そうそう。陽ちゃんは典型的な理系だからよく大兄にしぼられてたわね」

「いいよな、ゆかりは。文系だし」

「一応僕も理系なんだけど？」

「お前は次元が違うだろうが!!」

凜君の言葉に即座に突っ込みを入れる陽ちゃん。こりゃ相当荒れてるな。そんな陽ちゃんの肩を叩いて大ちゃんが（余計な）ことを言った。

「大丈夫！ 俺も一緒に怒られるから！」

「何が大丈夫なんだよ!!」

はい。これにはさすがの私と凜君も大爆笑。ゆかりちゃんのなんか笑いすぎておなか抱えて逆に苦しそう。ここまで笑う人、初めて

みたかも。

「ほらー。後ろにたまってる4人！自分のクラスに戻れー」

次の数学の試験官として教室に入ってきたのは噂の遠峰先生だった。いかにもだるそーにテスト用紙を抱えている。

「じゃあね、美月ちゃん。残り数学もがんばりましょ」
「うん。ありがと」

ゆかりちゃんが男子3人を引き連れて教室を出て行った。
テスト用紙が配られて、ふと教室の前、遠峰先生を見た。あれ、手の文字、消えてる。いったいいつの間に消したんだ。

「んじゃ、始めるぞー。お前ら準備いいな？ 始め」
いかにも俺面倒臭い、やる気無い、とでもいいたそうな声でテスト開始の合図をし、教卓の前の椅子に座りこんで何やらペンを動かしている。

「ああ、もうマルつけてるんだ」

というか、そこで丸つけていいの？ 見えるんじゃないか？ と思ったが、そうだ、この学校は適当だったということを出して、一人納得。

目の前の解答用紙を埋めることに集中した。

第12夜（後書き）

季節性ないな……。未だに美月たちは春です。初々しいです。羨ましいです。

そんな事を思う今日この頃です。

第13夜(前書き)

クリスマスが近い。だがまだ春だ!!
真冬に春の物語をお楽しみくださいww

はーるがきーたー はーるがきーたー どーこーにー きたー？

第13夜

「んじゃ、テスト返すぞー」

「もう!?!」

担任の遠峰先生が教室に入ってくるなりこんなことを言い出したのは、テストがあったその日。もう丸つけ終わらせたのかよ!?!? そう思ったのは私だけではなかったらしく、クラス全員の声がきれいに八モった。

「だって、授業のときとか返すのめんどいじゃん。今ならばぱつと返してそのまま帰らせられるから。俺、授業とか時間とられるの嫌だし」

いやいやいや、他のクラスは授業のときに返さなきゃいけないでしょうが。しかしそんなことにはお構いなし。さっさとテストを返し始めた。

「おーい、次、如月」

「あ、はい!」

私は如月だから意外と早く順番が回ってくる。ぼーっとしてる間もなく名前が呼ばれる。

「ほい。よく頑張ったな」

そう言って笑顔で返される答案。よかったあ。お咎めは無しみた
い。

自分の答案に視線を落とすと、そこには96の数字。うん。まあ

まあかな。どこミスったんだろ？

「んじゃ、模範解答配るから全員席につけー。ちなみに今回のクラス平均は68。クラスストップは96だ。採点ミスとかあったら持つてこい」

……ん？ 今、なんと言った？ クラスストップ、96？ ……私か！？

「みーつきー！ どうだったー？」

「うわ、すごー！」

そう声がして慌てて顔を上げると、そこには私の手元を覗き込んでいる陽ちゃんとゆかりちゃん。その視線の先には……私の答案！！

「うわ、ちょっと見ないで！！！」

「いいじゃん。すごーい点数でしょ、それ」

「うん……。クラスストップだつて」

「クラスストップ！？ 美月ちゃん、勉強できるじゃない」

ゆかりちゃんが大笑いに驚いて見せる。そりゃ私もクラスストップなんて初めてだからびっくりしてるけど。

「そこ、答えこうだよ」

そう言っつて私の間違えた漢字を書いて見せてくれているのは凜君。その後ろには引きずられてきたのであるう、大ちゃん。たぶん同じように何かしらのテストが返されたのだらう。その顔は蒼を通り越して白い。どんだけ悪かったんだ、この人。

「あ、そこそう書くんだ……。ちなみに凜君は？」

「うーん、この答案見る限り、満点じゃない？」

「流石……」

さらりと満点宣言ですか。流石です。流石としか言いようがありません。陽ちゃんはというと、模範解答を睨みつけて、必死に何やら計算しているようだ。

「あー！！ 後2点足りなかった！！」

「な、何が!？」

陽ちゃんがいきなり大きい声出すからびっくりしちゃったじゃないか。しかも何だ、その今にも世界が滅ぶとでも言いたそうな声は。

「基準だよ。大地さんの。今回のテストでは65点以上で合格なんだって。それ未満はお説教」

「へえ、そうなんだ。大変だね」

「大変どころじゃないって。ホントに怖いんだから。特に国語は。……あー、今からもう足が震えてる」

そんなに？ 後ろを振り返ると、大ちゃんも同じように自分の身体を抱きかかえて震えている。

「大知、お前も？」

「うん。しかも俺、国語8点も足んない。かなりやばい」

「あんたらいくらしぼられても懲りないからね。大人しく大兄の補習受けてきなさい」

あれ？ お説教って補習なの？ 遠峰先生教えるの上手だし、そんなに怖がることじゃないと思うんだけど……。

そんな私の疑問が顔に出たのか、ゆかりちゃんが説明してくれた。

「大兄はね、一回目とか、テスト前とかはきちんと丁寧に優しく教えるの。でもね、テストでちゃんと教えたことが出来てなかったり、努力を怠ったりすると、すごいスパルタになるのよ」

「僕も一回だけ受けたことあるけど、なんて言うのかな、ただ怒鳴り散らすんじゃないかって、そのオーラというか気配というか、がめちやくちや怖い」

凜君が受けたことあるんだ。そこが1番驚きです。

「そうそう。中学の初めてのテストのときね。凜君、あれで懲りて勉強きちんとするようになったんでしょ？」

「うん。もう2度とあんなの受けたくないもん」

怖……。マジで怖。凜君がここまで頭が良くなるきっかけになっただって、どんだけ怖いんだよ。

「その時ね、大地さんに言われたんだよ。僕はやればやるだけ伸びるって。大知なんかはただ頭はたかれながら問題解かされまくってただけだね」

凜君が懐かしそうに笑う。その時は怖くても、今となってはいい思い出なのだろう。

「それから少し勉強真面目にやるようになってから、今みたいになった。もともと僕、勉強嫌いじゃないし。何か一度真剣に向かい合ったら面白くなっちゃって」

結局ただの天才か！！

「大兄に伸びるって言われただけでここまで伸びたんだから、凜ちゃんもすごいわよねえ」

「同感。ただの天才じゃん」

「別に。好きこそものの上手なれ、ってことじゃない？」

勉強が好きか。私にはとてもじゃないけど無理だな。でもそうやって好きでやれるのって羨ましいと思う。どうせ同じようにやらなきゃいけないなら、好きで楽しいほうがいいに決まってる。

「どうやったら勉強なんて好きになれるのかね……」

「どうって、考えたことないな……。気が付いたら楽しかったし……」

私の独り言のつもりだったのに、凜君が真剣に考え始めてくれた。その横顔が少しかっこよくてドキッとした。あれ、最近の私、ちょっと変だな。

「みつきー。俺、俺どうしよう」

まだ悩んでたのか、2人とも。すっかり忘れてた。

第13夜(後書き)

やーまにきーたー さーとにきーたー こーこーにーきたー W W

第14夜

新人生テストから4日後の金曜日の放課後。

「なあ、美月。今日から部活見学始まるんだけどさ、どこ行くか決めた？」

「とりあえず、誘ってもらったバスケ部とサッカー部は行くつもりだけど……」

「マジ!? じゃ、俺張り切っちゃお!!」

「お前もまだ仮入部だろ……」

みんなでぎゃいぎゃい騒いでいるところに、凜君の冷静な一言が。

「大知も陽平も明日大地さんのところで補習だろ」

「「それを今言うな!!」」

陽ちゃんと大ちゃんの悲痛な叫びが響き渡った。今回私とゆかりちゃんと当然凜君は補習なし。陽ちゃんは国語、大ちゃんは全教科引っかけって明日補習を受けることになったらしい。

「ううー。バスケ部の顧問、大地先生なんだよな。今会ったの怖ー」

「俺サッカーでよかった……。明日のことは忘れて思いっきり楽しんでこよ」

陽ちゃんの絶望したような声と、少し浮かれたような大ちゃんの声。いや、どっちも同じだと思っただけ。とりあえず、アホ2人は放っておいて、私はゆかりちゃんと凜君に話を振ることにした。

「ゆかりちゃんはバスケ部だったけ? 凜君は?」

「そ。あたしはバスケ部。1年ぶりに暴れてくるわ」
「僕は特に気になる部活とか無いし、このまま帰る」
「凜君部活入らないの？」
「だって面倒臭いじゃん」

あれー、昨日帰り際に科学部とかその他頭脳系の部活からめっちゃくちや勧誘されてなかったけー？ 一応顔くらい出すのが礼儀ってものじゃ……。

「それに、全部顔出して結局どこにも入らなかったら、それこそ失礼でしょ」

「まあ、確かに」

凜君も凜君なりに考えがあつたらしい。失礼しました。

「そろそろ時間だよ。ほら陽ちゃん、大ちゃん、あたしたちは着替えてから行かなきゃいけないんだから、さっさと行くわよ」

「うわ、ホントだ。じゃな、美月ちゃん！ 絶対来てくれよ！！」

陽ちゃんと大ちゃんはゆかりちゃんに半ば引きずられるようにして、更衣室があるほうへと向かっていった。

それを苦笑ともとれるような笑顔で手を振り見送る私と凜君。3人が見えなくなると、凜君は私のほうを向いて言った。

「じゃ、僕はそろそろ帰るから。せいぜいガンバって」

「あ、うん。凜君も気をつけて」

凜君の後ろ姿を見送りながら考えた。ガンバって、て何を？ それを私が理解したのは、数分後のことだった。

「はい！」

体育館に響き渡る声。ボールが地面を打つ規則正しい音。時折混じる、床を蹴って鳴るキュツと言う音。そして……

「暑い……」

体育館にこもるすさまじい熱気。普段体育で使うときとはケタ違いの熱気に、早くも私は参っていた。やっぱり万年文化部の私には無理だつて……。

でも、真剣にボールを追うゆかりちゃんと、シュートを決めて先輩に頭をガシガシとなでられながら照れ臭そうに笑っている陽ちゃんはとても楽しそうで、バスケットが大好きなんだろうな、って思った。

「だけでもう無理！！」

私は休憩になったところを見計らって、体育館を後にした。

体育館を後にした私はサッカー部のいるグラウンドに来ていた。仮入部期間は新入生も交えてゲームをやっているらしく、大ちゃんはコートの中にいた。

コートに立つ大ちゃんは、いつものお茶らけた雰囲気はなく、真剣で凛々しい表情をしていた。

……何だ、あんな顔もできるんじゃない。

「あ、美月ちゃん!!」

……と思ったが、私の姿を見つけた途端、いつものアホ丸出しな顔で手を振ってきた。正直恥ずかしくて他人のふりをしたかったが大ちゃんの輝いた笑顔を見るとそんなこともできず、手を振り返してしまった。

ああ、自分でも顔が引きつっているのが分かる。

「なあ、大知。この子だね？ 知り合い？ 紹介しろよ」

「待て待て。焦るなよ。怖がってるだろ」

練習が休憩になったのを見計らって立ち去ろうとしたのだが、さすが運動部とも言っのだからか、私が立ち去る前に囲まれてしまった。正直、私よりも背が高い男子に囲まれるのは怖い。

「えと、中山君の友達の、如月美月です」

「へー、美月ちゃんっていうんだ。可愛いね。サッカー部のマネージャーにならない？」

私が男子に囲まれてあわあわしているうちに、上級生たちも集まってきたら、私はさらにあわあわしてしまった。大ちゃんに視線をやって助けを求めるが、大ちゃんはニコニコ笑ってみているだけだ。

「ほら、あなたたち！ いつまで休憩してんの！ さっさとコート戻れ!!」

「うわ、やべ。鬼が来た。じゃ、またね、美月ちゃん」

「マネージャー、考えてみてね」

グラウンドに響き渡る、高く澄んだ声を聞いてサッカー部員たちが慌ててコートに戻りだす。声のしたほうを見れば、そこには長い髪を高いところで一つにまとめ、ジャージに身を包んだ女の子がいた。

「ごめんね、あんなむさい男たちに囲まれて怖かったですよ。私は中山梓紗。サッカー部のマネージャーよ」

「あ、いえ、そんな。私は如月美月です」

あれ、中山？ 梓紗……？

「あの、失礼ですが、大知君のお姉さんですか？」

「あら、知ってたの？ そう。恥ずかしいことにあの馬鹿の姉よ。よろしくね」

改めて梓紗さんを良く見ると、とてもきれいな人だった。すらりと伸びた姿勢、髪をまとめているから際立つ小さい顔。

「ほら大知。あんたもさっさと加わらないと入部させないわよ」

「そりゃないぜ、姉貴。じゃあな、美月！」

コートに向かって走り去る大ちゃんの後ろ姿を見送りながら、私はもう少しサッカー部を見学することに決めた。

第15夜

「ただボールを蹴って相手のゴールにいれるだけ。ただそれだけなのに、とても面白いと思わない？」

梓紗さんが私の隣に座りながら言ってきた。確かに細かいルールはあるかもしれないが、ルールを知らない私から見ればただボールを蹴っているだけにしか見えない。

「それなのに、いくら見ても飽きないですね」

「でしょ。私がマネージャーやってるのも、サッカーに魅せられたからなのよね」

そう言って笑った梓紗さんの顔はとてもきれいで、ホントにサッカーが好きなんだな、って思った。

「でもねー、見ての通り、こいつら馬鹿ばかりだから……」

肩をすくめて笑って見せる梓紗さん。口ではそう言いながらもその口調には愛が溢れていて、ちょっと羨ましくなった。

「まあ、私も夏の大会終わったら引退なんだけどね。それまではたつぷりしごいてあげることにするわ」

「マネージャーって、どんなことするんですか？」

「お、興味出てきた？ そうね、基本的には部員のケアよ。例えば、タオル渡したり、水用意したり」

「へえ、なんか大変そうですね」

「そうでもないわよ。大好きなサッカーを間近で見れるし、あいつらは仲間だから、あいつらが頑張ってるところを応援できるのはす

「ごく嬉しいの」

仲間、か。梓紗さんは3年生だから、3年間付き合ってきた仲間ということになる。短いようで長い3年間を共に頑張ってきた仲間だから、その嬉しさも増しているのだろうか。

「一緒にプレー出来なくてもね、なんとなく繋がってる気がするのよ。特にゴールを決めた後こっちを見てガッツポーズしたときとか」「おーいマネージャー！ 1年生が怪我したからちよつと見てやってくれない？」

「はい！ 今行きます！ ごめんね、美月ちゃん。良かったらもう少し見学して行って」

そう言い置いて、梓紗さんは慌ただしくグラウンドのほうへと駆けていった。……うわあ、美人な人って、走ってもきれいなんだな。背筋がすらりと伸びて綺麗に回転する足。風に揺れる髪。私もあんな風に走れたらいいな。私、運動音痴だから走れないのよね……。

結局その日は見学できる時間ギリギリまで見学して、体験入部していた大ちゃん、陽ちゃん、ゆかりちゃんと一緒に帰った。3人もそれぞれ今日の体験に満足したらしく、運動をしたせいもあって上気した頬で一気に語りだした。もちろん聞くのは私しかいないから喧しいことこの上ない。

「あー、もう！ 何言ってるのかさっぱり分かんない！！ 順番に話して」

「だってよ。誰から話す？」

「じゃ、あたしから」

当然のようにゆかりちゃんが言って、話し始める。男2人は不満

げに、しかしどこかもう諦めたようにゆかりちゃんを見ている。

「今日ね、女子バスケット部に参加したら、去年大会で見かけたすごいプレーをする先輩がいたの！ あたし、その人がこの高校に入ってるって知らなくて……」

「あー、その話はもういいな。次俺ー」

大ちゃんに口を挟まれても止まらないゆかりちゃんの口。もはやもう誰も聞いていないのに一人で喋っています。これはもうあれだ。口に出したいだけなんだ。理解。

「今日サッカー見てどうだった？ 面白いだろ！ な！ な！！」

「あー。うん。面白かったよ」

「だろだろ！！ 俺サッカー大好きでさ。小学生のときからやってんだけど、その時から一緒にやってる奴が……」

「大知。美月が困ってるから」

私のほうに身を乗り出して話し始めた大ちゃんを陽ちゃんが回収してくれた。感謝。

「じゃ、次、俺の話してもいい？」

「うん。今日どうだった？」

「知ってると思うけど、バスケット部の顧問って大地先生なんだよ。で、今日も先生に教わってたら褒められた！ さすが陽平だ、って」

よっぼど遠峰先生に褒められたのが嬉しかったのだろう、陽ちゃんの顔がキラキラと輝いている。私はそれを微笑ましく眺めていた。

「バスケット部も楽しそうだったなあ。私には絶対無理だけど」

「そんなことないよ。バスケット、練習すれば俺みたいになちびでも

出来るんだから。それに、どうしてもダメならマネージャーっていう手もあるし」

陽ちゃんはどうしても私にバスケット部に入ってほしいのか、強烈に押してくる。それに反応して、それまで好き勝手に話していたゆかりちゃんと大ちゃんも話に割り込んできた。

「そうよ。バスケット、楽しいわよ。美月ちゃんも一緒にやりましょうよ」

「えー、美月ちゃんはサッカー部だよ。今日楽しそうだったもん」

「バスケット」

「サッカー」

「ストップ!!」

少々不穏な空気が流れだしたので、私の判断でタオルを投げさせていただきました。

「分かった。じゃあ私……」

「私?」

「帰宅部にする!!」

「えー!!」

喧嘩になるなら最初からどこにも入らない。これが一番穏当に解決すると思うのよ。私が下手にどちらかに決めてしまうと、さらにバトルが勃発しかねない。

3人も不満気ではあるが、最終的には美月がそう言うなら、とか何とか言って言葉をおさめた。凜君がガンバって、って言ったのって、これだったのかな。

第16夜

ピロリロリン

まだ春休みに買ったばかりで真新しい私のケータイがメールの着信を告げた。開いて送り主を見ると、ゆかりちゃんからだった。

『ただいま補習中。早くも泣きそうですww』

そう本文が書いてあって、添付されたファイルを開くと、

「免れてよかったあ」

教科書を丸めて持っている凜君と遠峰先生の二人に挟まれる陽ちゃんとおちちゃんが写っていた。写真に写る二人は早くも涙目になっていて、見ている分には大変面白かった。

ピロリロリン

写真を眺めていると、またメールを着信した。開いてみると、ゆかりちゃんからだった。

『面白いから見に来なよ。あたしんち分かる？』

折角のお誘いだし、今日はこれといってやることもないからいいか。

私はゆかりちゃんに行く、と返信し、いつもお出かけセット一式を詰め込んだあるバッグを掴むと、不思議そうな顔をしている母に行ってくださいとだけ伝えて家を飛び出した……とここでふと考える。

差し入れでも持って行ってあげようかな。

駅へ続く道を歩きながら、お財布の中身と駅近辺のお店を考えを巡らせる。よし、あそこなら私のお財布事情とも兼ね合いがつく。

私は駅の近くにある小さなお菓子屋さんでクッキーの詰め合わせを購入すると、ゆかりちゃん家へと向かうべく、電車に乗り込んだ。

「お邪魔しまーす」

「あ、美月ちゃん！ いらっしやい。遅かったわね」

「ちよつと寄り道してて。あ、そうだ。これ、差し入れ」

「わざわざよかったのに。でもありがと。みんなあたしの部屋にいるから先に上がってて」

ゆかりちゃんはそうとだけ言って、自分はお菓子の袋を持ってキッチンがあるのであろう方向に消えた。私もさつさとゆかりちゃんの部屋に向かった。私もだんだんこの人たちに付き合うの、慣れてきたな。

私が部屋に入ると、真っ先に気づいて声をかけてきたのは大ちゃんだった。

「お！ 美月ちゃんだ！！ いらっしやい！！」

「大知、お前俺の前で問題から気をそらすとはいい度胸だな。 50
問追加」

「え、嘘！ そりゃないよ大地さん！」

「……さらに30問追加するか？」

「嘘です嘘です。謹んでやらせていただきます」

……噂には聞いていたけど、補習中の遠峰先生って本当に怖いんだね。教科書丸めて持ったままその冷笑は怖すぎます。何も言わないけど、大ちゃんの隣で凜君に見張られながら問題を解いている陽ちゃんも怯えているのが分かる。

「大ちゃんも馬鹿ね。こうなるって分かってるなら最初からテストちゃんとやればいいのに」

「それで出来れば今ここで勉強してないつつの!」

「大知……20問追加」

「ごめんなさい!」

うわー、ホントに鬼だ……。こんなにスパルタな人、今では滅多にいないんじゃないかな。

私が変わなところで感心していると、陽ちゃんが後ろにパタリと倒れ込んだ。

「お、終わったあ……」

「お疲れ、陽平」

どうやら陽ちゃんは終わったらしい。凜君も陽ちゃんの肩を叩きながら労っている。そんな陽ちゃんに大ちゃんがちらりと一瞬羨ましげな目を向ける。

「お疲れ、陽平。でもこれでだいたい間違ったところは分かっただろっ」

「はい。自分の苦手なところも分かりました」

遠峰先生が陽ちゃんが書いていたノートを取り上げると、そこに書かれている文字にざっと目を通す。そして満足そうに一つつなず

くと、ノートを陽ちゃんに返した。

「俺が気になってたところもちゃんと直ったみたいだな。陽平のそういう物分かりがいいところ、俺は好きだぞ。それに比べて大知は……」

遠峰先生は大ちゃんに怒りとも呆れとも諦めともとれる視線を向けると、一つため息をついた。

「漢字こそ違うとはいえ、同じ名前の奴がこのありさまなのは情けない……」

「大地さんは悪くないですよ」

「大兄は悪くない」

「大地先生は悪くないですよ」

「遠峰先生は悪くないと思います」

大ちゃんを除く子供4人の声がハモった。

それを聞いた大ちゃんの顔が驚きからみるみる泣きそつな顔に変わっていく。

「あ、うう、そんな……」

大ちゃんはキャパを超えてしまったらしく、言葉も出ないようだ。

「あ、そうだ。美月ちゃんが差し入れでお菓子持ってきてくれたのよ。ひと段落ついたんなら食べようよ」

「悪いな、如月。あ、大知はちゃんと問題解いてるよ」

「そんなあ」

「終わらなかつたお前が悪い」

半泣きの大ちゃんを遠峰先生はぱつぱりときって、さっさと背を

向ける。

「あ、分かっていると思うが、俺が目を離れたからといってちゃんと問題解いてなかったら、問題量倍にするからな」

遠峰先生の黒い微笑みブラックスマイルと共に発せられた言葉に、大ちゃんはぶんぶん頭を大きく縦に振って答える。

「じゃ、折角だからいただきましょ。美月ちゃん、ありがとね」
「そんな大したものじゃなくて申し訳ないけど……」

私が持ってきたクッキーはお皿に綺麗に盛られていて、ゆかりちゃんと一緒に持ってきた紅茶からはとてもいい匂いがしていた。センスいいな。

「やっぱりゆかりが淹れてくれる紅茶は最高だな」

紅茶のカップを持った凜君が言った。この人に紅茶とか似合います。逆に陽ちゃんは猫舌なのかしきりにカップに息を吹き込んでいる様は幼い子供のように全然似合っていないかった。

私もゆかりちゃんが淹れてくれた紅茶を楽しみながら、クッキーへと手を伸ばす。私たちの間には和やかな空気が流れていた。

「俺の分、残しておいてね……」
「うるさい」

ゆかりちゃんにはつきりときられた大ちゃんはがっくりと肩を落とす、問題に向きなあった。

第17夜(前書き)

やっと続き書けた。今回は補習後の話。

第17夜

ゆかりちゃんが言い出したのは、大ちゃんもやっと補習が終わって、遠峰先生がどこかへ出かけて子供5人でお茶会をしている時だった。

「ねえ、明日何の日か知ってる？」

「明日？ 日曜日だけど、何かあるの？」 「ああ、明日か」「」

私と男の子3人の言葉がかぶった。私以外の人は把握しているらしい。

「美月ちゃんは知らないと思うけど、実は明日、大兄の誕生日なのよ」

「毎年うちの姉貴がケーキ焼いて、ゆかりんちで誕生日パーティー開くんだよ」

「参加は毎年自由だけど、参加するならなんかプレゼント持ってかなきゃいけないんだ」

「そっぴや大知は金が無いつて言う理由でプレゼント買えないから参加しなかつた年があつたな」

「うわー！ それは言うな！！ 大地さんには……」
「大兄ならもう知ってるわよ」

ゆかりちゃんの最後の一言で大ちゃんが撃沈した。うん、まあ、大ちゃんらしいと言えば大ちゃんらしいな。

「というわけで、今年は美月ちゃんもどうか、って思っ」

「え、私も参加していいの？」

「当然よ。美月ちゃんはあたしたちの大切な友達なもの」

なんか目にジーンときた。やばい。嬉しくて泣きそう。

「ちょっと美月ちゃん!? 何で泣いてるのよ!??」

「え、私泣いてる?」

私を見てゆかりちゃんがワタワタしている。男性陣もびっくりして目を丸くしている。

手を目元にもっていくと、何か冷たいものに触れた。泣いているのは本当らしい。

「別に何でもないの。なんか、友達って、幸せだなんて思って」

「なんだ、そんなこと。当たり前でしょ。友達なんだから」

それって理屈になってない。でも、そう言ってくれるゆかりちゃんがとても嬉しかった。

また泣きそうになったのでその前に私は退散することにした。

「遠峰先生へのプレゼントか……。どんなものがいいんだろう」

私はぷらぷらと駅から自宅までの道を歩きながら考えていた。

そんなとき、私の目にあるものが飛び込んできた。

「あれは……。リストバンド?」

駅前の店のショーウィンドウに飾られていたのは黒を基調とした肌触りのよさそうなリストバンドだった。思わずその店にふらふらと入ってしまった。

実際に手に取ってみると、それはふわふわとしてとても肌触りが良かった。それにデザインがシンプルだから何に合わせてもいいかも。

「よし。値段も手ごろだし、プレゼントはこれにしよう」

会計を済ませて簡単に包装してもらった。そして手渡されたプレゼントを大事に抱え込むと、私は家路を急いだ。

次の日。つまり日曜日。私は朝からクローゼットの中の洋服を引っ張り出して悩みに悩んでいた。だって担任の誕生日パーティーだよ！？ いったい何を着ていけばいいというのよ！！

「美月！ 早くしないと遅れるわよ！！」

「分かってる！！ あー、もう！ これでもいいや！」

私が手に取ったのは淡い色合いのワンピースだ。これの上に何か着てけばなんとかかなるだろう。

そもそもなぜ私がこんな朝からバタバタしているのかというと、昨夜ゆかりちゃんからのメールでパーティーの準備を手伝って欲しいと頼まれたからだ。

お母さんにそのことを伝えると、自分のことのように喜びながらいろいろと持ち物の準備を手伝ってくれた。

「行ってきます！！」

「気をつけるのよー」

なんとか準備を済ませて家を飛び出す。正直電車に間に合うかどうか微妙な時間だ。

「美月！ おはよー！」

「陽ちゃん！ おはよ！ 今急いでんの」

「もしかして次の電車？ そんなに待ち合わせ時間って早かったっけ？」

「違う。手伝いに行くだけ。陽ちゃんたちはまだ！」

「ふーん。じゃあ、ついでだから俺も早く行く！」

そう言うや否や、陽ちゃんは私の手を取って走り出した。流石バスケ部と言うべきか、陽ちゃんに手を引かれて走り出したとたんぐんと速度が上がる。

「ちょっと待って！ 速い、速いって！」

「でも早くしないと電車遅れるぞ」

「それも困る……」

足をからませないように走るのに精いっぱい私の私に比べて、陽ちゃんはけろつとした顔をしている。これが運動部とその他の違いだろうか。

駅に着いたころ、私は肩で息をしていた。確かに電車には間にあったけど！ ちなみに陽ちゃんは息ひとつ乱していない。このくらいでは運動にもならないということだろうか。

「大丈夫か、美月？」

「だ、大丈夫」

いや、大丈夫じゃない。でもそんなこと言えないじゃないか。陽ちゃんも心配そうな顔で私の顔を覗き込んでいる。

電車に乗って開いている席に座り、深呼吸しながら乱れた息を整える。陽ちゃんも私の隣に座って私の息が整うのを黙って待っている。

「ごめんね。でもすごく助かった」

「あ、いや。俺こそごめん。何も考えずに思いつきり走っちゃった。美月は女の子なのにな」

「そんなことはどうでもいいの！ 私が運動音痴なのが悪いんだし！」

「そうか……？」

陽ちゃんがしゅんとして頭垂れている体勢から上目づかいでこつちを窺っている。その不安そうな視線に思わす心臓がどきりと跳ねる。な、何だ今の。

「ほ、ほら！ もう大丈夫だから！ ね？」

「ホントに……？」

まだ不安そうにこつちを見ている陽ちゃんにこつと笑ってみせた。陽ちゃんはやつと安心したように微笑んだ。その笑顔にまたどきりと心臓が跳ねる。な、何なんだいったい！？

「美月？」

「見ないで！！」

陽ちゃんから顔を背ける。だって顔が赤くなっているはずだから。陽ちゃんは不思議そうにしていたけど、それ以上何もいわず、2

人で静かに電車に揺られていた。

第17夜（後書き）

書いてから思った。主人公格5人を差し置いて大地さんが一番誕生
日早いつてどうよw w

まあ、私はお兄ちゃん好きですから？ 何も問題ありませんw w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4142x/>

月好きの日常

2011年12月27日00時52分発行